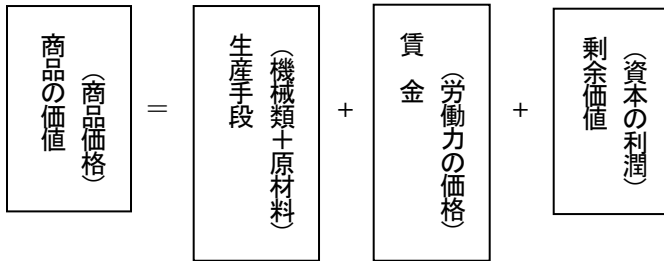


の間の社会的富の分配はいっそう不均等になるというのです。資本家は同じ資本をもつて、前よりより多くの労働を指揮するようになり、つまり低賃金



でさらに多く労働者を雇えるようになるのです。よつて労働者階級に対する資本家階級の権能は増大し、労働者の社会的地位は悪化し、いちだんと資本家の地位の下に押し下げられたのです。

相対的賃金・利潤率・搾取率

司会Ⅱなぜ労賃は分け前ではないといえるのでしょうか。

HAⅡ商品をつくるには労働力という商品が必要で、その価値として支払われるのが賃金であるということです。資本家がものを生産するには元々の資本が必要で、原料や機械と同様に、

労賃すなわち生産させる労働者もあらかじめ雇います。その時点で労賃は支払われているというので、新たにつくられた生産物からその分け前で労賃が支払われるのではないということです。AⅡ賃金を下げるといふ理屈は、生産に使うために買った道具や機械の代金

を、商品が売れなかったので、安くしてくれということですよ。そんなこと通じませんよね。

YⅡ価値を貨幣で表したのが価格ですから、その商品がどういふ構成で価値がつけられているかと言え、第一に生産手段の価値が移転されてきた部分があり、第二に、生産する労働者の賃金分が入ります。そして最後の第三にその労働者が剰余労働をさせられることのでつくられた剰余価値分というように、3つの構成によつて商品の価値が構成されて、価格として売られるのです。問題は第三のそれ以上の超過分である資本の利潤という部分です。第一の労賃すなわち労働者が労働することによつてつくりだした価値です。

司会Ⅱ労働者は、自身の労賃分の価値と、資本の利潤となる分の剰余の価値という両方の価値をつくるということですね。

YⅡ資本家の取り分と比較した労働者

の賃金のことを相対的賃金といい、どれだけ搾取されているかは搾取率として、 m/V (剰余価値/労賃) で表されます。しかし資本家はどう考えるかというと、労賃だけでなく原料や機械などの生産手段からも剰余価値が生まれるということで、利潤率として、 $m/C+V$ (剰余価値/生産手段+労賃) で表されます。つまり資本家は搾取率で考えず、利潤率で考えているということです。この考え方から資本家は、労賃は分け前だということです。

S II機械化により生産手段Cが増え、分母が大きくなるので、有機的組成の高度化により利潤率は常に下がっていきます。そこで、逆に利潤率を上げていくにはどうしたらいいかと考えると、生産手段Cをどれだけ節約するかになります。保安のサボですね。それから労賃Vを下げることで、合理化により分母を小さくすると利潤率が上がることになります。

T IIそれは労働者を危険にさらし、資本家は儲けるといふことですね。

Y II労賃Vも減らしたいので、労働者が権利を主張し、賃上げを要求することは、資本家にとって邪魔なのです。

労賃と利潤との関係性は

H A II労賃と利潤との騰落の相互関係を決定する一般的法則は、「利潤は、労賃が下落するのに比例して増加し、労賃が騰貴するのに比例して減少する。」ということです。

このことに対して、次のように異論を唱えるでしょう。「資本家は労働者の賃金を搾取して儲けているのではなく、他にいろいろと工夫をして利潤をあげているのだと。」

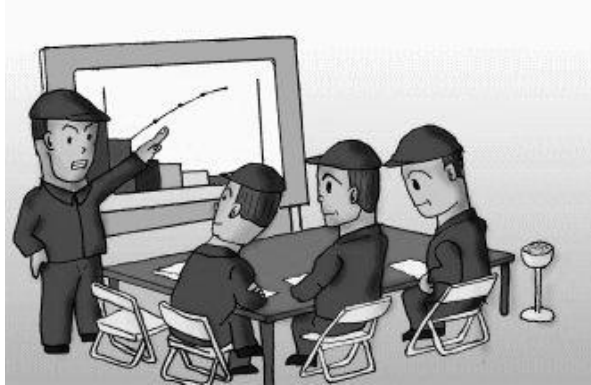
この異論に対してマルクスはこう答えています。

①労働は、それが資本家にもたらす純収益と比べればより少なく支払われる。

②商品価格の変動にも関わらず、各商品の平均価格、それが他の商品と交換される比率は、その生産費によって決定される。

このことによつて資本家階級の内部での騙し合いは相殺されるのだと。機械の改良などは、ある与えられた労働時間内に同一分量の労働と資本とをもつてより多くの生産物を生み出すことができるようになるが、決してより多くの交換価値をつくり出すことはできない。他の資本家を騙して少しばかりの利益を得たところで、結局商品の社会的平均価格は生産費によつて決定されるのであるから、騙し続けることはできない。生産方法の刷新により同じコストで多く生産できるようになったところで、ものの価値は下がり交換価値総体が増えることはないのです。

最後に、一国であろうと全世界市場のであろうと、資本家階級すなわちブルジョアジーが、生産の純収益をど



小集団活動

んな比率で相互間に分配しようとも、この純収益の総額は常に、蓄積された労働の全体が直接的労働によって増加されただけの額にはかならない。だからこの総額は、労働が資本を増加させるのに比例して、すなわち利潤が労賃に比べて増加するのに比例して増大す

るのです。要するにわれわれが資本と賃労働との関係の内部に立ちとどまる場合でさえも、資本の利害と賃労働の利害とは正反対に対立するのです。

資本の利害と賃労働の利害

T II 会社は「生産性を上げる」と言うのですが、それはどういうことですか。S II 生産手段を先進的なものに取り換えるという方法もありますが、何よりも労働者の働き方や意識をどう変えるかという部分が大きいかと思えます。今の働き方改革も同じく「生産性の向上」を大きく掲げています。

H A II 生産性向上は、当局側からだけでなく、労働者側からの提案という形でも進められていますね。

S II 小集団活動は、労働者思想を無くしていく攻撃と受け止めなければなりません。集団管理をしていわゆる労働者同士で監視し合うことや、一緒にな

って会社のことを考えようという、思想攻撃であり、労使関係の対立の解消と労働者の団結破壊が狙いなのです。K II 労務管理も姿が変わってきて、昔は莫大なお金をかけて攻撃をかけてきたけれども、今はもう成果主義賃金に移行して、手間暇もお金もかけずに管理していますよね。

T II 郵政では携帯端末ですべての行動を管理されています。入力できていないと同じ仲間から注意される。労働者同士で管理し合っています。挙句の果てに休んでいないのに休憩時間を入力したりなど、嘘の入力が横行しています。管理者も管理者で、虚偽を知っていて、あいつは作業が早いと言うのです。

司会 II みんなの意見は最後のところに集約されていますね。「要するにわれわれが資本と賃労働との関係の内部に立ちとどまる場合でさえも、資本の利害と賃労働の利害とは正反対に対立す

る。」と、これが春闘をたたかう意義です。資本は利潤を最大限獲得するために労働者に対して攻撃をかけてくる。労働者はたたかう以外にないという事です。

資本の急速な増加の結果

資本の権能が増大する

H II 資本の急速な増加は利潤の急速な増加に等しい。利潤が急速に増加するのは、労働の価格が、相対的労賃が、同じく急速に下落する場合だけであり、相対的労賃は、たとえ現実労賃が名目労賃・労働の貨幣価値と同時に騰貴しても、利潤と同じ比率で騰貴するのではなく、下落しうるので。例えば好況期に労賃が5%だけ騰貴するのに対し、利潤の方は30%だけ増加するならば、相対的労賃は増加したのではなく、減少したことになります。

そのため、労働者の収入が資本の急

速な増大につれて増加しても、それと同時に労働者と資本家とを区別する社会的間隙が増加し、同時に労働に対する資本の権能が、資本への労働の依存が増加します。労働者は資本の急速な増大に利害関係をもつという意味は、急速に資本の富を増加すればするほど、ますます大きな破片が彼の手に落ち、ますます多くの労働者が使用され、かつ生み出され、資本に依存する賃金奴隷大衆がますます増加されうることです。

労働者階級にとって最も好都合な状態であるできるだけ急速な資本の増大も、それがどれほど労働者の物質的生活を改善しようとも、利潤と労賃とは相変わらず反比例する。最後に、賃労働にとつて最も好都合な条件は生産的資本のできるだけ急速な増大であるという事は、ただ次のことを意味するにすぎないのです。

「労働者階級が彼らに敵対する権

能・彼らに君臨する他人の富を急速に増加し増大すればするほど、彼らは、ますます好都合な条件のもとで、新たにブルジョアの富を増加させ、資本の権能を増大させるために労働すること

を許され、ブルジョアジーによって引きずり回されるための金の鎖を喜んで自ら鍛えることを許されるということである。」

金の鎖（鉄鎖）を鍛えるとは

S II 労働者が生きていくためには、資本の急激な増大が必要と書かれています。資本が大きくなっていけば賃金も少しずつ上がる。労働者の生活が良好であるためには、資本も良好であることが必要なのです。そのために自ら喜んでこの関係を、金の鎖を鍛えると書かれています。

Y II 資本主義の仕組のなかで、労働者

◆特集 みんなの学習講座



三池闘争（警官隊との激突）

が資本の権能の増大により搾取され続けていくことにより、結局は資本を没落させる労働者の意識をつくりだしていくことにつながります。皮肉を込めて書かれていますね。

SⅡ問題の本質は「社会変革の第一歩は労働者の権利意識である。これをい

かに高めるか。」ということですが。労働者は今これを奪われて、職場でも問題意識を持ってない状況にあります。それを持つことによって階級対立が生まれるのです。

司会Ⅱ労働者としての哲学をしつかりと身につけていこうということですね。

YⅡ労働者は、賃金を労働力商品の再生産費に等しい状態にしておくためには、資本家とたたかっていくしかありません。しかし連合のいう労働分配率というのは明らかに違う。この資本家側から分け前をもらうという考え方は、たたかいはつながりません。

SⅡ郵政で採用されようとしていた人が郵政ユニオンに入るとなった瞬間に、当局は聞きつけてすぐに保留になりました。それだけ団結を恐れているのです。国労やJALでも組合員であることを理由に差別的に攻撃が行われました。三池ではこのような人々たちを生産阻害者というレッテルを貼って解雇し

たのです。資本が怖がるのは労働者の団結です。遠回りでも長い道なのですが、学習・討論によって仲間を地道に増やしていくしかないのです。

YⅡまとめですが、資本の蓄積は資本主義社会では絶対法則であり、競争に打ち勝つためにも蓄積します。国民の生活を良くしようと生産をしているのではなく、剰余価値をより増やして蓄積していくために生産を行っていることを理解しておくことが必要です。

『資本論』では、「資本が蓄積されて労働者の状態は、彼が受け取る支払いがどうであろうと、高かろうと安かろうと悪化せざるを得ない。」と書かれています。それが次第に労働者階級に広まっていくから反作用で労働者が団結して立ち上がるのです。資本主義社会は自ら崩壊することはないのです。資本主義が自ら発展すればするほど自身を追い込んでいくという矛盾でもあるのです。